

特集 戦後70年

あの日々を 忘れないために

多くの人の心や生活に深い傷跡を残した太平洋戦争の終戦から、今年で70年が経ちます。戦争を経験した人の多くは亡くなるか高齢になり、戦争の記憶は薄れつつあります。しかし、私たちが暮らす今の平和な世の中は、戦争で亡くなった人や厳しい生活を余儀なくされた人々の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはいけません。

戦争の悲劇を二度と繰り返さないためには、戦争の記憶を風化させることなく、次の世代へと引き継いでいくことが大切です。戦後70年の節目を迎えるこの夏、平和の大切さについて改めて考えてみませんか。

☎ 社会福祉課
088488・67・6058



太平洋戦争中、円一町一帯で行なわれた軍事訓練。戦争の時代に突入していったのは三原も例外ではありませんでした



15歳の時、原爆で両親を亡くした松井妙子さん(糸崎一丁目)

伝えなくてはならない原爆の^{むご}惨さ 原爆被害者之会 ^{まついたえこ}松井妙子さんの語り部活動

「頭に浮かぶお父さんとお母さんの姿は若い頃のまま。声はもう思い出せません」。6月末に糸崎小学校で行なわれた平和学習。原爆被害の悲惨さを伝える松井妙子さんの話が始まると、講堂はしんと静まり返りました。3〜6年生約80人の真剣な眼差しが、松井さんに集まります。

「15歳の夏、原爆は私の大切な物をすべて奪っていきました」。70年前、松井さんは当時住んでいた広島市内で原爆に遭い、両親と住み慣れた家、大切な友人を一度に失いました。

熱線に焼かれて悶え苦しむ人や黒こげになった遺体の山の間を縫うように、学徒動員で働いていた工場から家路を急いだ記憶。焼け崩れた家の瓦礫の中から父の遺骨を探し出し、まだ熱かったその骨を泣きながら拾い



平和学習で松井さんの話に真剣に耳を傾ける糸崎小学校の児童



自ら描いた絵などを見せながら、原爆の恐ろしさを伝える松井さん集めた悲しみ。そして、とうとう遺体さえも見つからなかった母の事。

「長い間思い出さたくもなかった悲しい出来事ですが、平和のために自分が伝えなくてはならないと思ったのです」。松井さんは原爆被害の語り部になった理由をこう話します。

戦没者原爆死没者追悼式・平和祈念式典

とき 22日(土) 9時30分～
ところ 芸術文化センター ポポロ
内容 黙とう、献花、平和祈念の作文朗読、吹奏楽演奏など
※お供えなどはお受けしていません。



慰霊と平和祈念の黙とうを

70年前の8月6日午前8時15分に広島市へ、9日午前11時2分に長崎市へ原爆が投下されました。今月15日は終戦記念日です。戦争や原爆の犠牲となり、亡くなられた人たちの冥福と恒久平和を祈り、黙とうを捧げましょう。

松井さんは「今は好きな事ができ、欲しいものは手に入る世の中。その豊かさの礎に、戦争で奪われた多くの人の命があることを忘れてはいけません。」と言います。
同じ過ちを二度と繰り返さないため、原爆の悲惨さを伝える松井さんの活動は今年の夏も続きます。



平木ヨシエさん(大和町棕梨)は夫・勝さんを亡くし、24歳の若さで戦争未亡人となりました

「あんたがおってくれるけえ」 太平洋戦争で夫を亡くした ^{ひらき}平木 ヨシエさんの記憶

農家の一人娘として生まれた私は、20歳のときに豊田郡棕梨村の平木家へ嫁ぎ、昭和19年1月に娘を授かりました。
幸せもつかの間、その年の7月、夫に召集令状が届きました。「子どもが『お父さん』と言えるようになるまでは、来なければいいが」と話していた矢先の事でした。
出征当日は、河内駅まで歩いて見送りに行きました。夫はさまざま心残りがあったのでしようが「あんたが家におってくれるけえ、いいわえ」と一言だけ残して汽車に乗りました。
数日後、夫が戦地に向かうというので、子どもを背負って広島まで会いに行きました。面会は1時間だけでしたが、膝の上に娘を抱いて、茶を飲ませるうれしそうな夫の顔が、今も思い出されます。

24歳で戦争未亡人となった私は、毎日、畑仕事に精を出しました。実家に帰ると、親戚に「夫もいない嫁ぎ先で苦労して大変だ」と言われましたが、「一番の楽しみは子どもの成長でした。私は幼い頃に両親と死に別れ、親代わりだった祖父母を小学生の時に亡くしました。青春もなく、幸せな結婚生活も2年余り

夫がフィリピンの戦地にいることは、現地から届いた手紙で知りました。当時、戦争は日に日に激しくなり、フィリピンも全滅だという話を耳にしました。それでも「生きているのでは」という期待から、夫が戻ってくる夢を何度も見ても、夜中にうれし涙を流したものです。夫が戦死したことは昭和22年に公報で知りました。



妻と生まれて間もない娘を故郷に残し、フィリピンの戦地で亡くなった勝さん(写真中央)



出征先のフィリピンから届いた勝さんからの手紙。ヨシエさんと娘・英子さんを案じる内容がづばられています

で終わりました。人生を振り返り、どうにか生きてこられたのも、出征するときに夫が言った「あんたがおってくれるけえ」の一言がよりどころだったのかもしれない。本人だけでなく、家族までも苦しめる戦争を引き起こす、愚かな指導者の出ないことを祈ります。